中公文庫

金メダル男

内村光良

中央公論新社

目次

第一章　塩尻の神童　9
第二章　ミスター中庭　59
第三章　大都会東京　109
第四章　最良の女性　155
第五章　がんばったで賞　201
第六章　全力で生きていく　231
あとがき　260
解説　泉　麻人　264

金メダル男

やっぱり一番が好きなんです。
それを目指して一生懸命やっているときが、一番楽しいんです。
まったく我ながらとどまることを知らない懲りない男です。
１９６４年、東京オリンピックの年に生まれたわたしの宿命なんでしょうか。

1

第一章

塩尻の神童

１９６４年、東京オリンピックが開催された年、東海道新幹線が開通、日本武道館が開館、ホテルニューオータニがオープン、森永『ハイクラウンチョコレート』、ロッテ『ガーナチョコレート』、カルビー『かっぱえびせん』が発売された年、わたしは生まれました。

秋田泉一（せんいち）と言います。

長野県塩尻市の出身です。

そう、日本が高度経済成長まっしぐらという時代に、わたしは生まれました。

え？　一旦止める？　あ、わたしの声、でかすぎました？　これくらいだとどうですか？　あ、はい、じゃあ、このトーンで続けます。他の方のご迷惑になってもいけないですしね。……実は昔、劇団に所属していたことがあったんですよ。はい、わたしが。それにこんな風に取材を受けるなんて久しぶりなもんだから、気合い入っちゃいましたかね。

あーあー、はい、このくらいの大きさで。

しかしあれですね。今はボイスレコーダーも使わず、スマホにインタビューが録音できる時代なんですね。いやあ、マイクの性能の進化は、実に目覚ましいものがありますね。前に取材を受けたときは、今と違ってコードがついてる重たいマイクしかなかったから……。まぁ、かなり前のことですしね。そうそうマイクと言えば、子供の頃、ラジカセについていたマイクをテレビの前にこう近付けて、お気に入りの歌手の歌、よく録音したものです。トーク番組とかでそう話してる芸能人の方とかいますよね？　あれ本当にみんなやってたんですよ。わからない？　あなた、お若いですもんね。お幾つですか？　平成生まれ？　あれ、どうしました？　え、マイクの取材がしたくてわざわざここまで来たわけじゃない？　……すみません、話を戻してください。

今日は、〝まもなく52歳になろうとしているわたしが、これまでどう生きてきて、来たる２０２０年に向けて何を思い、何をしているか〟についてお話しすればいいんですよね？　隔週で発行されている情報雑誌『アントニー』の取材……。いや、知らなかったです。『ＢＲＵＴＵＳ』はわかるんですけど……。そちらとは一切関係がない？　はぁ……。そこで掲載されている『東京オリンピック生まれの男』という連載ページの取材。大丈夫です、理解してます。１９６４年・東京オリンピック生まれのわたしたちが、２０２０年の東京オリンピックをどう迎えようとしているか、各界で活躍している人たちに順番に話

を聞いている、と。

なに、１９６４年生まれの編集長の独断で続いている企画？　いや、わたしはいい企画だと思いますよ。送っていただいたバックナンバー読みました。温水洋一さんの回、とても面白かったです。今回、この秋田泉一に白羽の矢が立ったからには、同い年の編集長のためにも、一生懸命お話しさせていただきます……。

わたしの両親、秋田留一（りゅういち）と房江（ふさえ）は共に松本市内のデパートに勤務していました。父はネクタイ売り場、母はスカーフ売り場の担当。

社員食堂で顔を合わせる程度のふたりでしたが、１９６３年、会社の慰安旅行先の白骨（しらほね）温泉で一気に親密に……。お見合い結婚がまだ主流だった時代、当時流行（はや）り始めていた恋愛結婚の先駆けだったのでしょう。男女別に分けられた温泉場ののれんの前で偶然出くわしたりして、恋の炎は加速度的に燃え上がり、そのまま旅館の一室で合体、もとい、結ばれました。

まもなく母のお腹にわたしが宿り、翌１９６４年９月21日、この世に誕生したというわけです。

『こんにちは赤ちゃん』が白黒テレビやラジオからよく流れていた頃。２ＤＫの古い借家が、結婚当初の秋田家の住まいでした。

父は小柄ながら筋肉質で人当たりのよい大らかな性格。ただ大雑把過ぎるところがありました。家事手伝いなどほとんどやらない。亭主関白を気取ってはいましたが、実際は母の尻に敷かれていたと思います。

母は少し控えめな、それでいて一本芯の通った、強さと弱さの両面を持った可愛げのある人。背は高く、父と同じくらい。何より常にわたしの味方でいてくれる人でした。

ゆりかごの中、無邪気な顔でスヤスヤ眠っているわたしを見ながら、父と母はいつ終わるともない夫婦の会話を重ねたことでしょう。

「まさかなぁ、まさか一発でなぁ……」

「えぇ温泉でまさかの一発……」

ふたりの視線の先には、砂壁に張られた〝命名・泉一〟と書かれた半紙。そう、「泉一」の泉は〝温泉〟の泉から来ています。

生まれた頃の記憶なんてもちろんありません。両親から聞いたり、アルバムで見たりした景色を元にお話ししています。

1歳のときにビートルズが来日したことも覚えていません。佐藤栄作総理大臣はいつの間にか知っていた感じ。

初めてその瞬間をはっきりと覚えているのは、テレビの生放送で見た1969年7月の

アポロ11号、月面着陸の衛星中継。
「すべて順調、すべて順調……」
という同時通訳。扇風機の青い羽根からの風を顔に受けながら、
（日本人だけじゃない。世界中の人がみんな、いまこの瞬間、この中継を見ているんだあ）
と何となく感じたことを記憶しています。
テレビの力は偉大です。
『8時だョ！全員集合』や、幾度も再放送された『ウルトラマン』『ウルトラセブン』などに夢中になりテレビにかじりついていた頃から、わたしの記憶も次第にはっきりしてきます。
１９６０年代に「テレビっ子」という言葉が登場しましたが、まさに我らテレビっ子世代にとってテレビからの影響は以降も計り知れず、今後のわたしの話にもたびたび登場することでしょう。
記憶といえば、幼い頃のことって〝嬉(うれ)しい楽しい〟記憶よりも、不思議と〝悲しい怖い〟記憶のほうをより鮮明に覚えているものです。
理由まではわからないけれど、我がままが過ぎたのか、父に洗面器で思い切り尻を叩か

れたこと。

おもちゃを買ってくれとしつこく駄々をこねたのか、母に物置に閉じこめられたこと。

それから、『仮面ライダー』が始まった頃、6歳になったわたしが塩尻東小学校の入学式に向けて意気揚々と歩き出した途端、向かいの上村さん家の庭からシェパードが突進してきてふっ飛ばされた記憶もあります。

小学校の入学式という6歳児にとって一世一代の晴れの日に、そんな不幸な事態に襲われるなんて。真新しいランドセルを背負って颯爽と玄関のドアを開けたときにはまったく想像しなかったことが、1分後に起きる場合もあるのだと、その日わたしは学びました。

生きていくということは実に謎に満ちています。1分後のことすらわからない。ましてや明日のことなんて、誰にもわからない。

1973年10月。高度経済成長が息切れし、オイルショックの予兆が世間に現れ始めたある日、それまで漠然と生きてきたわたしに転機が訪れました。

小学校3年生、運動会の徒競走でのことでした。

先生に言われるまま、わたしは列に並んで走る順番を待っていました。クラスメイトたちは興奮と緊張の中、楽しそうに何やらしゃべっていましたが、友だちがいなかったわたしは静かに出走の瞬間を待つのみ。心細さから父兄席のテントに目をやると、ケンカでも

しているのか、何やら険悪な雰囲気の両親の姿がありました。
前列の生徒たちが出走し、いよいよわたしの走る番がやってきました。徒競走の定番曲『クシコスポスト』にあおられ、心臓がバクバクしていたのを覚えています。
「位置について、よーい」
ピストルの音が鳴り響き、一斉に駆け出していく――。
4コースのわたしは懸命に走りました。
しかし、わたしよりはるかに速い2コース、3コースの生徒の背中にどうしても追いつくことができません。それでもつんのめるようにしてひたすら足を前に送ります。
頭の中は無。心の中も無。前へ前へ。
そこには、今まで体験したことのない不思議な高揚感がありました。
周囲の歓声や悲鳴が徐々に消えていき、気がつくとわたしは、風を切っていました。
前方に映るのはセパレートラインのみ。
左右の景色は瞬く間に流れていき、一人抜き二人抜き。そしてわたしは、なんと1着でゴールテープを切っていました。
「うおぉー！」
突如、現実なのか幻覚なのか、大歓声が湧き起こりました。上級生のお姉さんがそばまでやってきて、

1
1

「おめでとう、一等賞」
と言いながら、1の数字の旗のほうへ誘導してくれます。それはまるでファーストクラスへ誘導するCAさんのように。
首に掛けられたキラキラ、キラキラ輝く金紙のメダル。
ふわふわ夢心地で歩いていると、父兄席の両親が、さっきまでの険悪さを微塵(みじん)も感じさせない満面の笑みで喜んでいるのが目に入りました。
「やった、一等賞よ」
「すごいぞ、泉一！」
さっきまでわたしになんの興味や関心も抱いていなかったクラスメイトたちが、
「秋田って意外に足、速いのな」
と口ぐちに話す声も聞こえた気がしました。
「うわぁー！」
現実なのか幻覚なのか、わたしは両親やその他の父兄、先生、生徒たちからの地鳴りのような拍手喝采、歓声の嵐の中、天まで昇っていくような感覚にとらわれました。
これが一番を獲(と)るということなのだ。
一等賞。このなんと素晴らしき甘美な響き。
金メダル。この絶対王者、唯一無二の存在。

この日初めてわたしは、一番上に立つこと、輝くことの幸福感・優越感を知ったのでした。

そしてこれを機に、ありとあらゆる一等賞を獲ることにとりつかれた、わたしの数奇な人生が始まったのです。

奇跡は続きました。母親をモデルに絵を描いたところ、何と子供絵画コンクールで金賞を獲得したのです。『太陽にほえろ！』で松田優作演じるジーパン刑事を横目でチラチラ見ながら適当に、そう、まったく適当に描いたにもかかわらず、金賞。

タイトル『お母さん』。

テーブルに肘をつき物思いにふける母の姿を描きました。

「失敗したかなぁ」

これは意図せずモデルを務めさせられた母の独り言。あとで知ったのですが、このときの母は真剣に離婚を考えていたようです。

快進撃は続きます。4年生に進級したわたしは、練習なしの一発勝負で半紙に『非凡』としたためると、書道コンテストに応募しました。これが見事、特選に選ばれました。

さらに図画工作コンクールでも大賞を受賞。作ったのは、得体の知れない黒雲のような形をした工作物。制作期間40分。